

2例で他は下行結腸またはS状結腸(3例は両者にわたる)で従来の報告通り左半結腸に多かった。狭窄型は2例、残りは一過性で4-5日で症状軽快するものが多く早期の内視鏡検査が必要である。38才男性, 20才男性, 32才女性の若年成人症例を呈示した。

26) 巻町の大腸癌検診について

登坂 尚志・広沢 秀夫)	(巻町国保病院)
齊藤 貞一・今井 哲也		
松浦 徳雄)	(県立がんセンター新潟病院)
加藤 俊幸・齊藤 征史		
丹羽 正之・小越 和栄		

我々は昭和60年から3年間、県立がんセンター新潟病院と共に、63年は単独で、巻町の便潜血反応による大腸癌検診を行なったので報告した。受診者数は60年は約1500名だったが、61年、62年は2000名を越え、63年は1800余名だった。一次検診の陽性率は年度により検査方法が異なったが、約10%だった。二次検診受診者数は150名前後で、受診率は80%前後だったが、63年は約90%と向上した。二次検診の方法は注腸検査を主とし、異常を認めた場合にCFを施行する事が多かった。結果は60年1503人中7人、61年2053人中1人、62年2090人中6人、63年1844人中5人の癌を発見し、61年を除いて、癌発見率は0.3~0.5%、早期癌は各年3人だった。癌症例に腺腫を合併する事が多く、中に腺腫内癌が認められる事もあり、腺腫発見例や、癌術後例の定期的な精密検査の必要性を強調したい。

27) 免疫学的便潜血反応による大腸癌検診の実態

須田 陽子・太田 宏信)	(新潟通信病院)
奈良 芳則		
尾崎 信紘		(同健康管理科)
植木 淳一・成沢林太郎		(新潟大学)
		(第三内科)

現職郵政省職員721名を対象に免疫学的便潜血反応(ラテックス凝集法)3日法及び1日法による大腸癌検診を施行した。陽性者は85名で75名に大腸内視鏡による精査を施行した。その結果、大腸癌2名、大腸ポリープ29名など合計36名、精査受診者の48%と高率に病変を発見し、22病変に内視鏡的ポリープ切除術を施行した。3日法と1日法で受検者総数に対する大腸癌や大腸ポリープなどの症例数はほぼ同率であった。また、3日法では、精検受診者数に対する有所見者率が1日法に比し低く偽陽性率が高率であった。以上の結果及び偽陰性例の存在

を考慮すると、免疫学的便潜血反応1日法を経年的に繰り返して行うことが大腸癌検診として有用であると考えられた。

28) 潰瘍性大腸炎と dysplasia の再検討

一癌の異型のバリエーションについて

味岡 洋一・渡辺 英伸)	(新潟大学)	
山口 正康・本間 照			(第一病理)
千田 匡			

潰瘍性大腸炎(UC)に合併する大腸上皮性腫瘍のうち、“従来の組織学的判定基準”では癌と判定できない病変は dysplasia と呼ばれてきた。

今回我々は高分化大腸 sm 癌17症例を用いて、従来の癌の組織判定基準一癌の異型度バリエーションの見直しを行った。その上で、潰瘍性大腸炎(UC)に合併した High grade dysplasia とされる病変の組織異型を検討した。

粘膜下層に浸潤した癌は高異型度と低異型度に分けられた。従来の大腸癌の組織診断基準は高異型度癌をもとにして作成されたと考えられ、低異型度の癌が考慮されていない。今後癌の組織診断基準を訂正してゆく必要があると思われた。

UCに合併した High grade dysplasia とされるの異型度は低異型度の癌と類似しており、癌である可能性が高いと思われた。

29) Cronkhite-Canada 症候群の1例

村山 裕一・武藤 一郎)	(村上病院)	
酒井 靖夫・山寺 陽一			(外科)
清水 春夫			
渡部 重則		(同内科)	

症例は54歳男性で下痢, 脱毛, 食欲不振, 体重減少を訴えて来院した。頭髪をはじめ眉毛, まつげ, 髭の脱落が見られ, 爪は白色調の変形を認めしばらくすると古い爪の脱落が見られた。胃十二指腸, 全大腸にびまん性に発赤した顆粒状の小ポリープが無数に存在し一見イクラ様に見えた。組織学的に腺管の過形成と嚢胞状拡張が見られ, 間質には浮腫と軽度の細胞浸潤が認められ, Cronkhite-Canada 症候群(CCS)と診断した。栄養管理と, ステロイド療法により約1ヶ月半で諸症状の改善とポリープの消失または減少を認めた。しかしステロイドを中止したところすぐに再燃したためステロイド療法を再開し軽快した。CCSは消化管ポリポージス, 下痢, 脱毛, 爪甲異常, 皮膚色素沈着を主症状とする極めて稀な疾患

である。ステロイド療法が奏功したとの報告も見られるようになったが、本邦報告123例を分析した後藤によると、癌の合併が予後を左右する因子であろうと言及している。

30) 腹部臓器に石灰化を伴ったサルコイドーシスの1例

鈴木 健司・荒木 進 (燕労災病院 内科)
榎本 悟 (新潟大学 第三内科)
渡辺 俊明 (新潟大学 第三内科)

症例は59歳の女性、昭和63年5月頃より出現した霧視を主訴に当院眼科を受診、眼科的にサルコイドーシスの診断を受けた。胸腹部X線写真にて、両側肺門リンパ節腫脹と脾臓を主とした上腹部の石灰化を認め、この精査のために10月14日当科へ入院した。26歳時に詳細不明ながら熱性疾患の既往がある。入院時現症では特記すべき所見はなく、検査成績では、ツ反11×10mm、抗核抗体20倍 (Speckled pattern)、リゾチーム・アンギオテンシン変換酵素の軽度上昇のみ陽性。肝生検でサルコイド結節を証明し、診断を確定した。石灰化の原因は、サルコイド結節の類上皮細胞が産生するビタミンDにより、サルコイド結節自らが石灰化する可能性も考えられた。

31) 胃癌に合併した腹膜偽粘液腫の1例

三上 恒正・斎藤 征史
星 一・後藤 俊夫
加藤 俊幸・丹羽 正之 (県立がんセンター 新潟病院 内科)
小越 和栄 (同 外科)
島田 寛治 (同 外科)
鈴木 正武 (同 病理)

粘液産生細胞が腹膜や大網に着床し、腹腔内にゼリー状の粘性性腹水が貯留する腹膜偽粘液腫は比較的稀な疾患である。その原発巣は良性と悪性を含め卵巣や虫垂が約72%を占め、胃癌によるものは極めてめずらしい。私共は胸部レ線の異常で来院し、精査の結果Ⅱc型胃癌由来と考えられる腹膜偽粘液腫の1例を経験したので報告する。症例: 50才、男性。現病歴: 昭和62年末より食欲不振と体重減少を認めるも放置。昭和63年2月胸部レ線で右胸水を指摘され来院。胃内視鏡検査で胃前庭部のⅡc型分化型腺癌、腹部CTで腹水よりhigh densityな結節状で肝波状彎入像を示す貯留物がみられ、胃癌に合併した腹膜偽粘液腫と診断した。切除不能であったが約1年後の現在生存中である。

第50回新潟消化器病研究会

日時 平成元年7月29日(土)
午後1時30分より
会場 新潟東映ホテル

一般演題

1) 小児胆嚢捻転症の1例

齊藤 文良・白崎 功 (木戸病院 外科)
阿部 要一
小川 淳・五味 崇行 (同 小児科)

胆嚢捻転症は1898年Wendelにより、はじめて報告され、本邦では1932年、横山らにより第1例が報告されて以来、これまで180余例を数える比較的稀な疾患である。小児の発症は極めて稀で、16例報告されているにすぎない。

最近我々は、小児の胆嚢捻転症を経験したので報告する。

患者は3歳8カ月の女児で、急性虫垂炎による穿孔性腹膜炎の診断で緊急手術を行なったところ、胆嚢捻転症であったため、胆嚢の捻転を整復し胆嚢摘出術を施行した。胆嚢はGrossⅡ型の遊走胆嚢で、時計方向に180°の捻転を認めた。摘出により手術後経過は良好であった。

2) 胆道癌における放射線療法の検討

真船 善朗・本間 明 (済生会病院 内科)
尾崎 俊彦・宮川 隆 (同 内科)
相場 哲朗・川口 正樹 (同 外科)

過去3年間に当院で経験した胆道癌15例のうちPTCDの内瘻化とコバルト療法を施行した4例について検討した。

4例の内訳は、胆嚢癌が2例、胆管癌が2例で何れも進行癌であった。PTCDの内瘻化後、コバルトは1回2Gy、合計50Gyを病変部に照射した。その結果、4例中3例は、減黄がみられ、そのうち2例は、1年以上の比較的長期生存を得ることができた。しかし、減黄が不十分であった例は、3カ月で死亡した。

結果として、PTCDの内瘻化と放射線療法は胆道癌の原発巣に対しては、有効と考えられた。しかし、遠隔転移に対しては、無効であり、化学療法や免疫療法を含めた集学的治療が必要である。